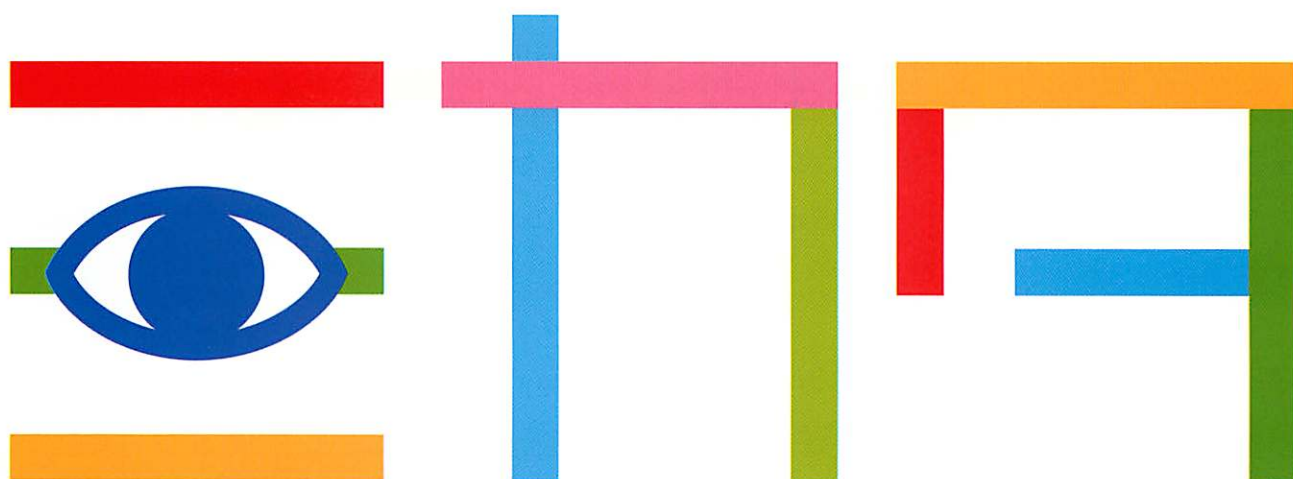


鑑賞学習教材 大型図版

みんなのミカタ



鑑賞学習教材 大型図版「みんなのミカタ」

Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art

鑑賞学習教材 大型図版



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が所蔵している画家、猪熊弦一郎の作品6点の大型図版とガイドブックによる本教材は、学校等で「鑑賞」の授業を行う目的でつくられたものです。

今回の教材は作品図版をみた子どもたちが最初にもった印象を大事にしたいと思って作りました。授業を受ける子どもたちの中には美術館に行ったことがない子もいることでしょう。それどころか美術館やそこに展示されている作品のことさえ知らない子がいるかもしれません。そんな子どもたちに対して鑑賞の授業をすることに、少々とまどいもあるかと思いますが、きっと子どもたちはそんな心配を気持ちよく吹き飛ばしてくれるでしょう。

子どもたちには先入観がそれほどありません。作品をどうみたらいいのか、という構えもないので、それぞれの見方で作品と向き合います。作品図版をみて気づいたことや不思議に思ったことの理由を、それまでに得た経験をもとに考えたり楽しんだりしながら、自分の言葉で語ることができるでしょう。それらを丁寧にきいてみると大人も「なるほど!」と思える瞬間に出会えたり、ユニークな見方に思わず頬がゆるんだりすると思います。そして教室内でそれぞれの見方が共有されると、共感をおぼえるだけでなく、自分とは違う見方に驚いたり感心したりして、子どもたちならではの鑑賞が深まっていくのです。

子どもたちは、作品図版から視覚的に得られる情報を言語で考え、それを書いたり話したりして表現し、また他人の意見を聞いて内容を理解し考えるという言語活動を繰り返します。その都度作品図版を注意深く見ながら感性を磨いていきます。コミュニケーション能力が育つばかりでなく、異なる価値観を認め受け入れる経験をもつこともできます。

いざ鑑賞の授業を考えると「作家の意図にどうせまったらいいのか」という声がありますが、そのような見方はひとつの手法にすぎませんし、また答えが一つとも限りません。タイトルや制作年、技法や作者の経歴などから、作品理解を深めたりより親しんだりできることもありますが、作品にまつわる情報を知ることと、作品をよく見て自分なりに考え、味わったり楽しんだりすることは別のことです。子どもたちから出た意見の中でそれらに触れることが必要な場面があれば、適宜伝えていくのが効果的だと考えます。

子どもたちは、それぞれの見方で作品と楽しく向き合いながらも、直観的にその表現の本質をとらえていきます。まずは自分の見方ができること、そして他の人の見方も大事にできることを目的とした、楽しく豊かな鑑賞の時間となることを願っています。

「… 見る人が主役、絵は主役のアイデアをひきだす起爆剤になってくれれば結構だと思うんです。」

(映像教材「guén 猪熊弦一郎」より、猪熊の言葉)

3ページより、各作品について発問例を記しています。

「発問について」をよく読み、授業を行う子どもたちと楽しく鑑賞する場面を想定しましょう。

1時間の授業の中で、全ての作品を鑑賞する必要はありません。鑑賞する作品や見せる順番、発問内容などは、子どもたちの年齢や経験に応じて自由にアレンジしてください。また、一枚だけでなく複数の作品図版を並べて、似ているところと違うところを探したり、「だれかにプレゼントをするなら?」「部屋に飾るなら?」「一番好きな作品は?」と問いかけるなどして使うこともできます。

鑑賞授業のコツ

見る・気付く

じっくりみる時間をとりましょう。

子どもたちの様子をよく見ておきましょう。子どもたちは、作品の気になるところを凝視していたり、思わずつぶやいていたり、友だちと確認しあう様子があるかもしれません。

一人一人の気づきや思いを大切にしましょう。発問にあわせたワークシートを用意しておくのもよいでしょう。

話し合う

気付いたことや、思ったこと、考えたことを発表させましょう。

作品図版でその内容を確認しましょう。

出た意見に対して、どう思うかを問いましょう。

発言した子どもに対し、どこを見てそう思ったのかを聞きましょう。

指で指し示すのではなく、なるべく言葉で表現するように促しましょう。そうすることで、子どもたちの言語能力を高めることになります。例えば、「絵の右上にある(場所)、赤くて(色)、ハートのようなもの(形)が…」と表現することによって鑑賞につながる言葉が引き出されるでしょう。

また、なぜそう思ったのかを聞きましょう。絵を見て気付いたり、思ったりした理由を考えることで、作品の鑑賞を深めることができます。特にでなければ、同じ意見をもつ他の子どもに聞いてもよいでしょう。

さまざまな見方が出てくることが予想されますが、自分なりの見方ができたことを大切に聞いてください。また、他の人との見方の違いを楽しめるような場にしましょう。

年譜などから事実としてわかっていることにふれる意見が出れば、そのことを伝えてもよいでしょう。

教師自身がもつ感想については注意深く扱ってください。その意見が答えであるかのように子どもたちが受け止めてしまう可能性があります。

まとめる

ある程度意見がでたら、これまでの意見を整理しましょう。

共通点がある場合もありますし、全く違った意見もあると思います。そこに関連性がある場合は深めてもいいですし、次の作品に移ってもいいでしょう。

使用している作品図版は鑑賞教材「ミモカ・アートカード」および映像教材「guén 猪熊弦一郎」とリンクしています。詳細は各作品ページのマークでご確認ください。



◀ミモカ・アートカード



◀guén 猪熊弦一郎



発問

「このあとどうなる？」

めあて このあとに続く物語を想像してみよう

発問について 4人の女性の様子や、変わった形の雲、小さな船などから、このあとに続く物語を想像してみましょう。その中で、今絵の中で起きていることや、過去に起こったことに触れる発言が自然に出てくるでしょう。1枚の絵で過去、現在、未来という時間の流れについて考えることができます。

+ 他にも…

「4人のポーズを真似して、劇をしてみよう」



発問

「何をしているの？」

めあて 描かれている人物になりきって答えよう「私は今…」

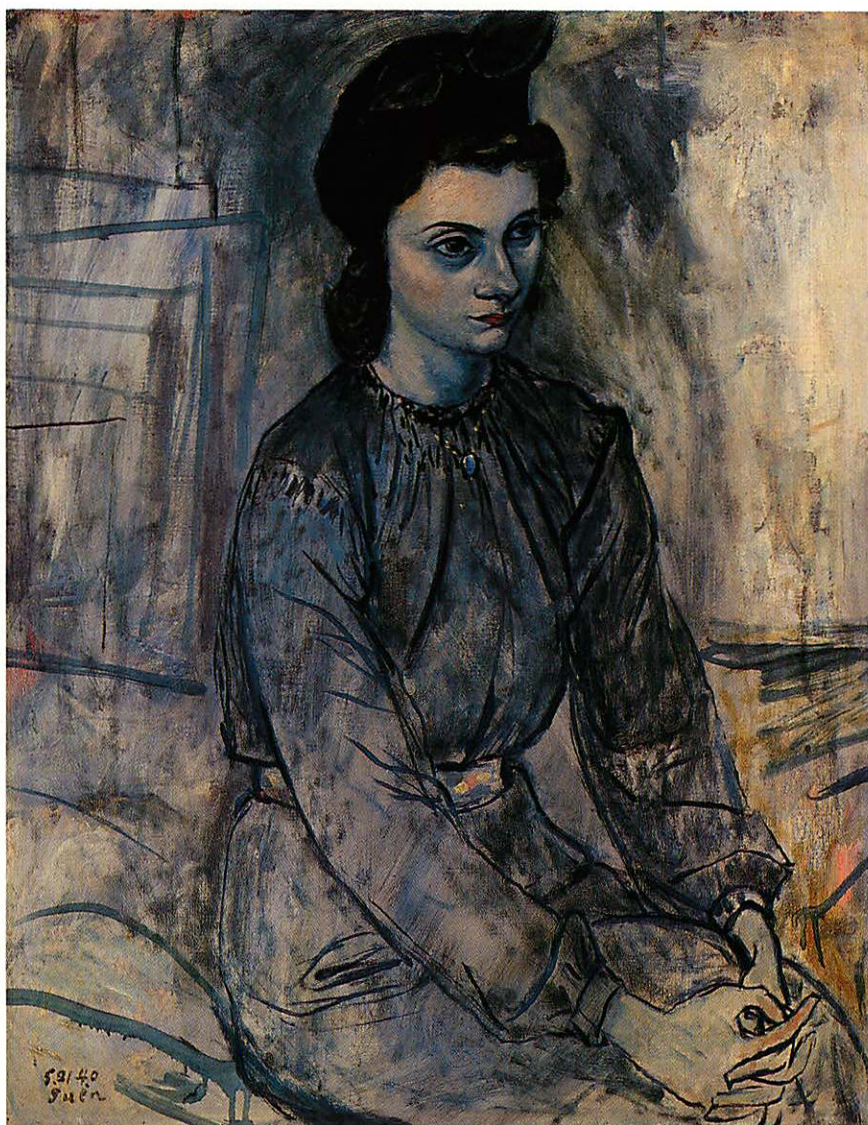
発問について

描かれている人物になりきってみることで、その人物の性格や、置かれている状況を想像することができます。この発問に答えるために、人物だけでなく背景に目を向けてみるのもよいでしょう。そこで、次のような質問をしてみましょう。

！ ヒント

「季節はいつ？」「時間帯は？」「どこにいるの？」

《マドモアゼルM》では、まず女性の表情を中心に心情を探ることを提案していますが、この作品では描かれているものや色彩をヒントに、女性のおかれている背景から鑑賞することを提案しています。



発問

「どんな気持ち？」

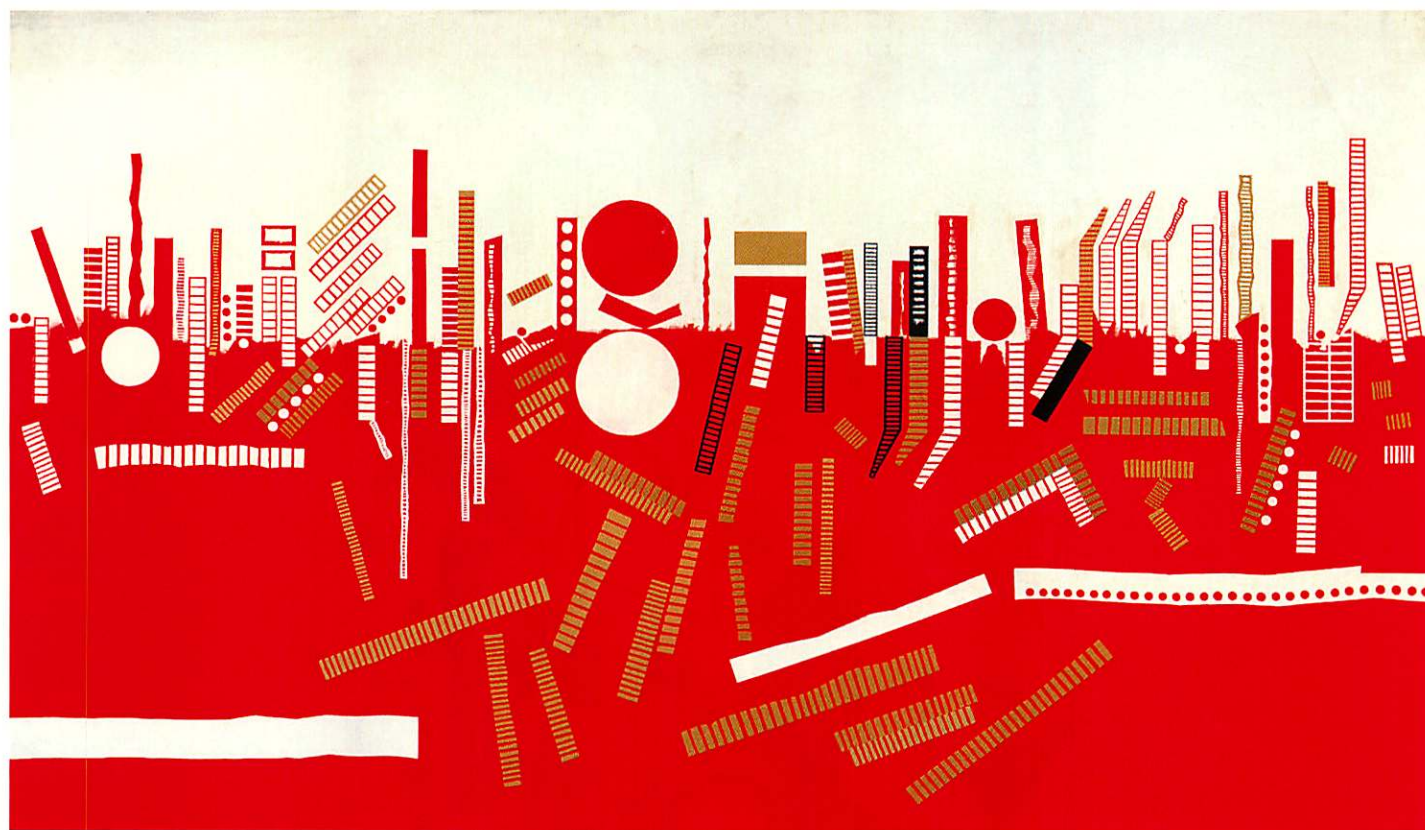
めあて 心の中をのぞいてみよう

発問について この作品では彼女がどんな気持ちかを想像します。

固く結ばれた口元や強い視線、手を組む様子など、表情や仕草を手がかりにしましょう。※前項参照

+ 他にも…

「どんな暮らしをしている人？」
「視線の先には…？」「何を考えているの？」



発問

「これ、何の絵？」

めあて どういう世界が広がっているのか想像してみよう

発問について 丸やはしごのような形が、想像をかきたてる1点です。上記の発問一つで、工場や遊園地、地上と地下の世界など、様々な意見がでるでしょう。

+ 他にも…

「上半分と、下半分はそれぞれどんな世界?」「音を想像しよう」
「ここはどこ?」「大きな赤い丸と白い丸はなに?」「住んでいるのは?」



発問

「何が隠れている？」

めあて いろいろな形を見つけよう

発問について

いろいろな形が絵の中に隠れています。それが何を表していて、この絵が何の世界を描いているのかを想像しましょう。初めに、右のシルエットと同じ形を絵の中からみつけることで、絵をすみずみまで見ることになり、他の形の面白さにも気付くでしょう。

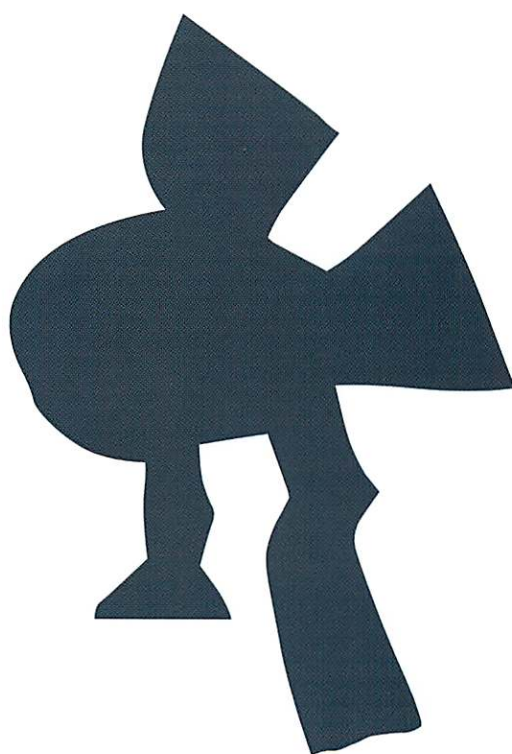
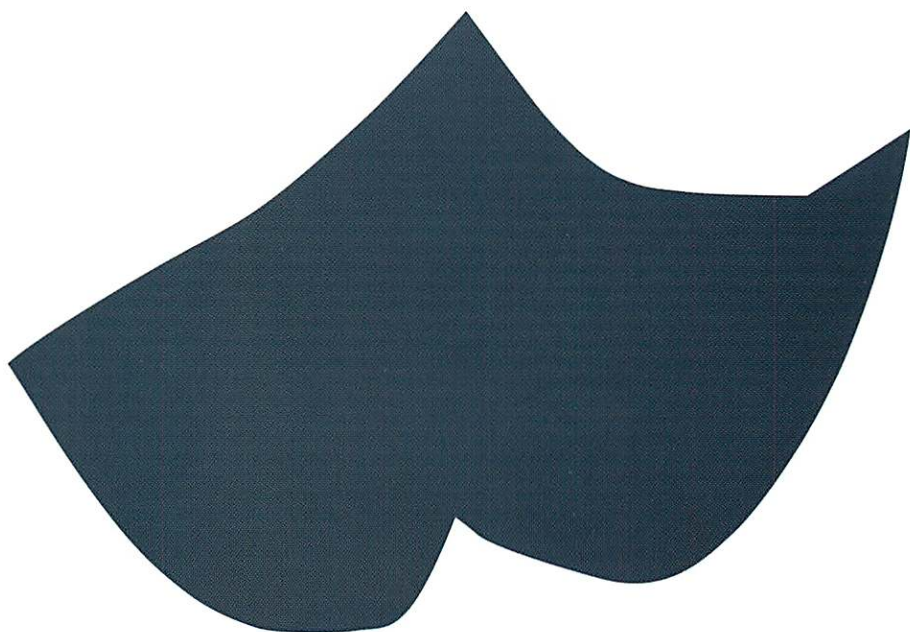
【作品画像の複製について】公益財団法人ミモカ美術振興財団は猪熊弦一郎の著作権を管理しています。学校のような公共性のある教育機関には特例措置として、先生および児童・生徒が教材として授業で使う場合には、複製が認められていますが改変等については、注意深く、最小限にすることが望まれます。上記の発問については、次項のシルエットと大型図版を同時に見せることを前提にしています。子どもたちに作品の部分だけを見せることは避け、作品全体のイメージが伝わるようご配慮下さい。

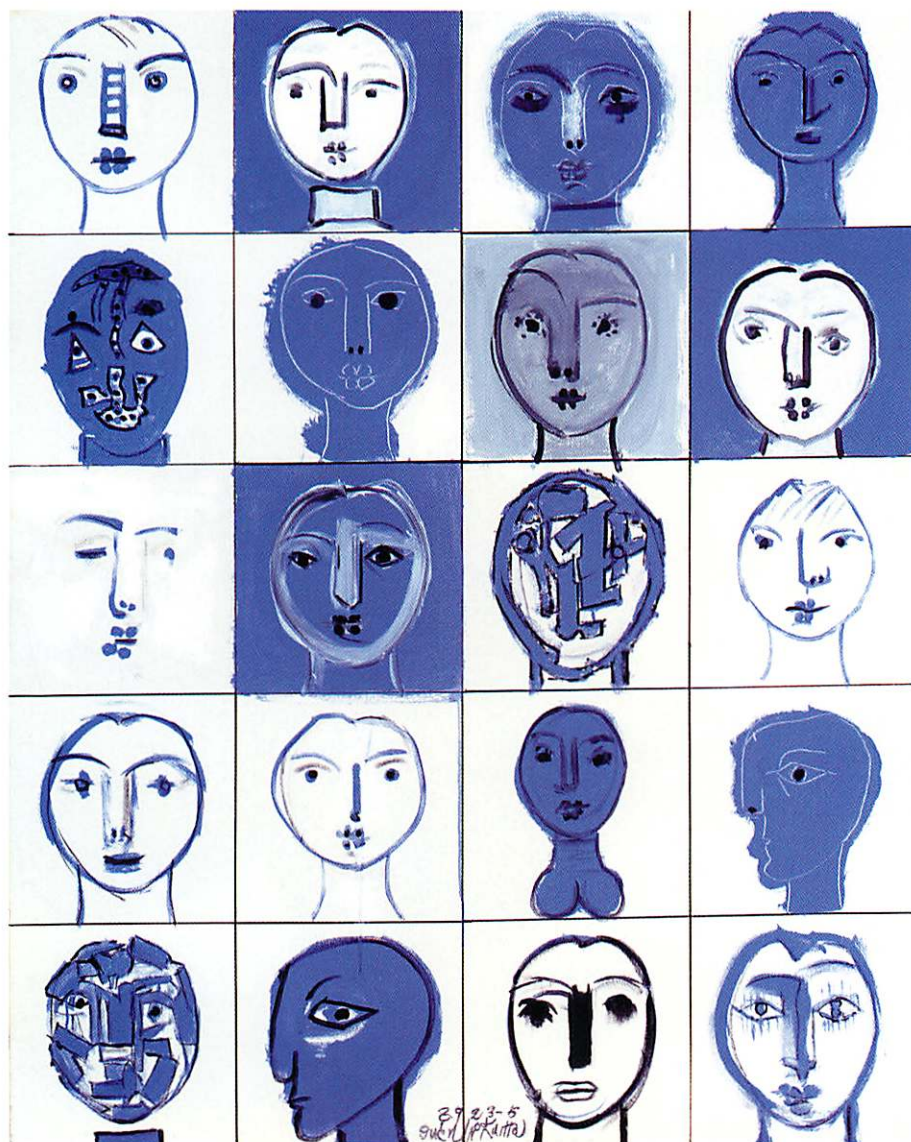
+ 他にも…

「まわりにはどうつづいていくの？」

→作品の周りの世界を想像して上下左右に絵の続きを描いてみましょう。

「気になる形のセリフを考えてみよう」





発問

「どの顔がどんな様子？」

めあて ▶ くらべてみよう顔と顔

発問について 20個ある顔は、一見よく似ていますが、同じ顔は一つとしてありません。描かれた人物の表情をよく見て、あてはまるカードを探してみましょう。あてはまると思うカードがなければ、白いカードに自分で書くのもよいでしょう。



他にも…

「好きな顔を探してみよう」「好きな顔とお話しよう」
「顔の真似をしてみよう」「好きな顔を描いてみよう」

本作品は映像教材「guén猪熊弦一郎」にて、猪熊が実際に描いている姿をみることができます。

くらくら

そわそわ

にににに

ぶつぶつ

やれやれ

きらきら

ぞくぞく

どきどき

ひりひり

もやもや

おどおど

しへしへ

つつん

はればれ

めろめろ

わくわく

いらいら

じちやじちや

ちらちら

はらはら

むかむか

よもよも

あきあき

へよへよ

ちくちく

のびのび

ほくほく

ゆづゆづ

借用の 手順

- 1** 右頁の「借用申込書」をコピーして必要事項を記入し、FAXにて当館(0877-24-7766)までお送り下さい。
また、「借用申込書」はホームページからもダウンロードできます。
https://www.mimoca.org/ja/school/tool/edu_form.pdf
- 2** 当館より、確認の電話を差し上げます。(FAX送信後、3日経っても連絡がない場合は、お手数ですがご連絡下さい。)



使用上の注意

- ◆貸し出された教材を他者へ又貸しすることを厳禁します。ただし、同一学校内および施設内で教材を使用することは可能です。
- ◆教材は借用期間内に必ず返却してください。事情により期限内に返却できない場合は当館までご連絡ください。
- ◆使用后、ご返却の際は、中身を確認し、お返し下さい。
返却方法は、貸出し時と異なってもかまいません。当館へ直接持ち込まれる場合は、事前に当館スクールプログラム担当までご連絡下さい。送付される場合、送料はご負担下さい。

作品画像の複製について

公益財団法人ミモカ美術振興財団は猪熊弦一郎の著作権を管理しています。
学校のような公共性のある教育機関には特例措置として、先生および児童・生徒が教材として授業で使う場合には、複製が認められていますが改変等については、注意深く、最小限にすることが望まれます。

問い合わせ先

〒763-0022 丸亀市浜町80-1 TEL 0877-24-7755 FAX 0877-24-7766
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 スクールプログラム担当
<http://mimoca.org> ✉ school@mimoca.org

年 月 日

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 鑑賞教材 借用申込書

FAX 0877-24-7766

学校名・施設名

住所

電話番号

FAX番号

取り扱い担当者

使用目的

借用希望セット数	● 鑑賞教材「ミモカ・アートカード」	セット
	● 映像教材「guén 猪熊弦一郎」(DVD)	枚
	● 大型図版「みんなのミカタ」	セット

借用希望期間 月 日 ～ 月 日 (最大4週間まで貸出し可)

受取方法 ☐ 美術館受け渡し(受付時間10:00～17:30)
☐ 宅配便(借用者払い)
☐ その他()

備考

【返却の際の注意事項】

- 「ミモカ・アートカード」はアートカード60枚、音カード60枚、ガイドブック1冊が入っていることを確認してください。
- 映像教材「guén 猪熊弦一郎」はディスク、2つ折ガイドが入っていることを確認してください。
- 大型図版「みんなのミカタ」は図版6枚とガイドブック1冊が入っていることを確認してください。

問い合わせ先

〒763-0022 丸亀市浜町80-1 TEL 0877-24-7755 FAX 0877-24-7766

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 スクールプログラム担当

<http://mimoca.org> ✉ school@mimoca.org

学校団体で来館を希望される方へ

教材をご使用になったあと、美術館で実物の作品に触れることは子どもたちにとってよい経験になると思います。展示室にて鑑賞の授業をしてみたいという方は、ぜひ当館スクールプログラム担当にご相談ください。

また、当館スクールプログラム担当が本教材でもご紹介している対話型の鑑賞を中心に解説もいたします。来館人数、先生のご希望、子どもたちの興味などにあわせてプランを組み立てます。まずは電話またはメールでお申し込み下さい。来館状況等確認し、追ってご連絡いたします。なお、お申し込みは来館希望日の1週間前までです。日時によってはご希望に添えない場合もありますので、ご了承ください。

〈お問い合わせ先〉

〒763-0022 丸亀市浜町80-1

TEL 0877-24-7755

FAX 0877-24-7766

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
スクールプログラム担当

✉ school@mimoca.org

下記の内容を本文に記載し、送信ください

【学校名】…

【学年】…

【人数】… 名(うち引率 名)

【来館希望日時】…

年 月 日 曜日 時 分

【滞在時間】… 分

【担当者】…

【電話番号】…

【ファックス番号】…

【メール】…

【説明】…要(分程度)・不要

【来館の目的】…

常設展〈猪熊弦一郎展〉・企画展・その他[]

【交通手段】…JR・チャーターバス・徒歩・その他[]

【バス専用駐車場利用】…あり・なし

※利用料金は無料です。ただし先着順の予約制のため駐車可否についてはあらためてご回答いたします。



Q1 ミモカが開館したのはいつ?

幼少時代を丸亀で過ごした猪熊弦一郎の全面的な協力のもと、1991年11月23日に開館しました。

Q2 入館料はいくらですか?

高校生以下または18歳未満の方は無料です。(学校団体で来館する際は、先生も無料です。)

Q3 どんな作品が見られますか?

猪熊本人より寄贈を受けた約2万点に及ぶ猪熊作品を所蔵し、常設展にてご紹介するほか、現代美術を中心とした年数回の特別展を開催しています。

本教材に掲載している作品は当館が所蔵していますが、必ずしも展示しているわけではありません。

詳しくは当館ホームページ(現在開催中の常設展)をご覧ください。

Q4 施設のみどころポイントはどこですか?

美術館正面のゲートプラザには、「創造の広場」という大きな壁画があります。どこかにサインと制作年があるので、探してみてください。

大階段の2階には「草」というオブジェが、3階までのぼると、滝のあるカスケードプラザに「トライアングルアンド レインボー」というオブジェがあります。

Q5 ミモカって何?

ミモカ(MIMOCA)は丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art)の略です。

もっと知りたくなったら、美術館2階にある美術図書室に来てください。

猪熊による「私の履歴書」、コレクションをまとめた「画家のおもちゃ箱」、展覧会カタログなど猪熊関連の図書や、生前の映像が視聴できます。

猪熊弦一郎年譜

1902

12月14日、父八太郎、母マサエの長男として香川県高松市に生まれる。
教師である父親の仕事にあわせて引っ越すことが多く、多度津、丸亀、坂出、普通寺に住む。小学校低学年のころ、東京美術学校出身でいとこの中村武平さんから絵の具を贈られ、絵の楽しさに熱中する。小学校5年生のときにイーゼルをつくり、それをもってスケッチに歩く。普通寺では学校の窓から騎兵隊の訓練がよく見え、姿の美しい馬ほどよく駆けよく飛ぶことを知る。

1916 ◆14歳

香川県立丸亀中学校(現 香川県立丸亀高等学校)に入学。
学校のそばにある丸亀城の森には五位鷲という淡いブルーとねずみ色の鳥がたくさん棲んでおり、羽を広げたり休めたりする様子を美しいと思って見ていた。このころから有名画家の絵はがきを模写するなど、本気になって絵を描きはじめる。「画家」と「発明家」のどちらをめざすか迷うが、「発明家」になるには大事な数学が弱かったため絵描きになろうと決心する。

1922 ◆20歳

東京美術学校(現 東京藝術大学)西洋画科に入学。1年の夏休みに香川に帰省中、肋膜炎にかかり1年間休学する。
3年のとき藤島武二先生のクラスに入り教えを受ける。絵画とは物を正確にきちんと描くことではなく、それが硬いのかやわらかいのか、冷たいのかあたたかいのかなどその物をよく理解して描くのだと学ぶ。

1926 ◆24歳

片岡文子と結婚する。帝展(帝國美術院第7回美術展覧会)で着物姿の文子を描いた《婦人像》で初入選。その後9年間入特選をくりかえす。

1935 ◆33歳

新帝展に反対し不出品の盟を結んだ旧帝展第二部無鑑査の有志と組織した第二部会第1回展に《海と女》(★P3)を出品する。

1936 ◆34歳

芸術を純粋に追い求めたいという8人の仲間と新制作派協会(現 新制作協会)を結成し、若き画家たちのリーダー的存在として注目を集める。

1938 ◆36歳

妻と二人、船でフランスのパリへ向かう。パリに着いた次の朝、小さな宿から見える街の美しさと、長い間来たいと願っていたパリにいるうれしさに思わずポロポロと涙をこぼす。
フランスではおよそ2年をすごし、町の様子やそこで住む人々を描く。《サクランボ》(★P4)画家のアンリ・マティスを訪ね、絵をみてもらう。マティスの「おまえの絵はうますぎる」という言葉に、人に良くみてもらうためではなく、思ったことを素直に、うそや飾りのない姿で描くことが大切だと知る。パリではピカソにも会う。
第二次世界大戦が始まり、約1ヶ月間、画家の藤田嗣治夫妻とレゼジー村に避難する。《マドモアゼルM》(★P5)を最後に描いた後、1940年やむなく日本に帰る。戦中は、中国・フィリピン・ビルマに派遣される。

1944 ◆42歳

腎臓の手術を受ける。東京をはなれ、神奈川県津久井郡吉野町(現 藤野町)に妻と猫2匹とピアノとともに疎開する。
1945年8月15日、この地で終戦を迎える。

1946 ◆44歳

東京に帰る。この頃よりたくさんの猫を飼う。多いときには12匹の猫がいて、作品にもよく描かれるようになる。

1948 ◆46歳

『小説新潮』の1月号から表紙絵原画を描く。以後創刊40周年記念号(1987年9月号)まで連載する。

1950 ◆48歳

三越の包装紙「華ひらく」をデザインする。モチーフは千葉の海岸で見つけた角のとれた丸い石。はじめはクリスマス用として作られたが、評判がよく常時使われるようになり現在にいたる。

1951 ◆49歳

上野駅の壁画《自由》を制作する。戦争の終わった後、人々の気持ちを明るくするものにと、りんごの収穫やスキーをする人々など北国の暮らしを描く。
このころ日本にきたイサム・ノグチと出会い生涯の友となる。

1955 ◆53歳

ふたたびパリでの遊学を決意しフランスへ向けて旅立つ途中、アメリカに立ち寄る。親しい友人にすすめられて先にニューヨークを訪れるが、このときのパリとニューヨークどちらから旅をはじめるかの選択がその後の運命を決める。
高いビルがそびえたつニューヨークの底知れないエネルギーにひかれ、この街で勉強し直してみようという力強い勇気と大きな喜びをもって以後20年間創作活動と発表を続ける。
アメリカに渡ってから、抽象画を描くようになる。異国の地にあって日本人であることを意識した作品や、畳の目のように画面が短い線でうめつくされた作品、また空から眺めたような街や風景をテーマにした作品を多く描いた。《驚く可き風景(A)》(★P6)
社交的な猪熊夫妻はアメリカ滞在中もデザイナーのイームズ夫妻、画家のマーク・ロスコなど多くの人と交流を持ち、日本からの訪問客も多く「民間大使」と呼ばれた。

1964 ◆62歳

第6回現代日本美術展に出品した作品で国立近代美術館賞受賞、東京国立近代美術館に収蔵される。
翌年、文子の父の見舞いのため10年ぶりに日本に帰る。

1975 ◆73歳

健康を害し活動が困難になったため、ニューヨークのアトリエを閉じる。この年から冬の間は暖かいハワイで、残りは日本で制作にあたる。
陽光あふれるハワイで描くようになってから、色遣いが明るく鮮やかになり、また○や□などさまざまな形が登場するようになる。同じ頃、宇宙をテーマにした作品が多く描かれる。映画「スターウォーズ」が大好きで何度も映画館に通う。

1987 ◆85歳

《太陽は待つて居る》(★P7)を描く。

1988 ◆86歳

妻文子、病のため亡くなる。それをきっかけにたくさんの「顔」を描くようになる。

1989 ◆87歳

《顔20C》(★P9)を描く。

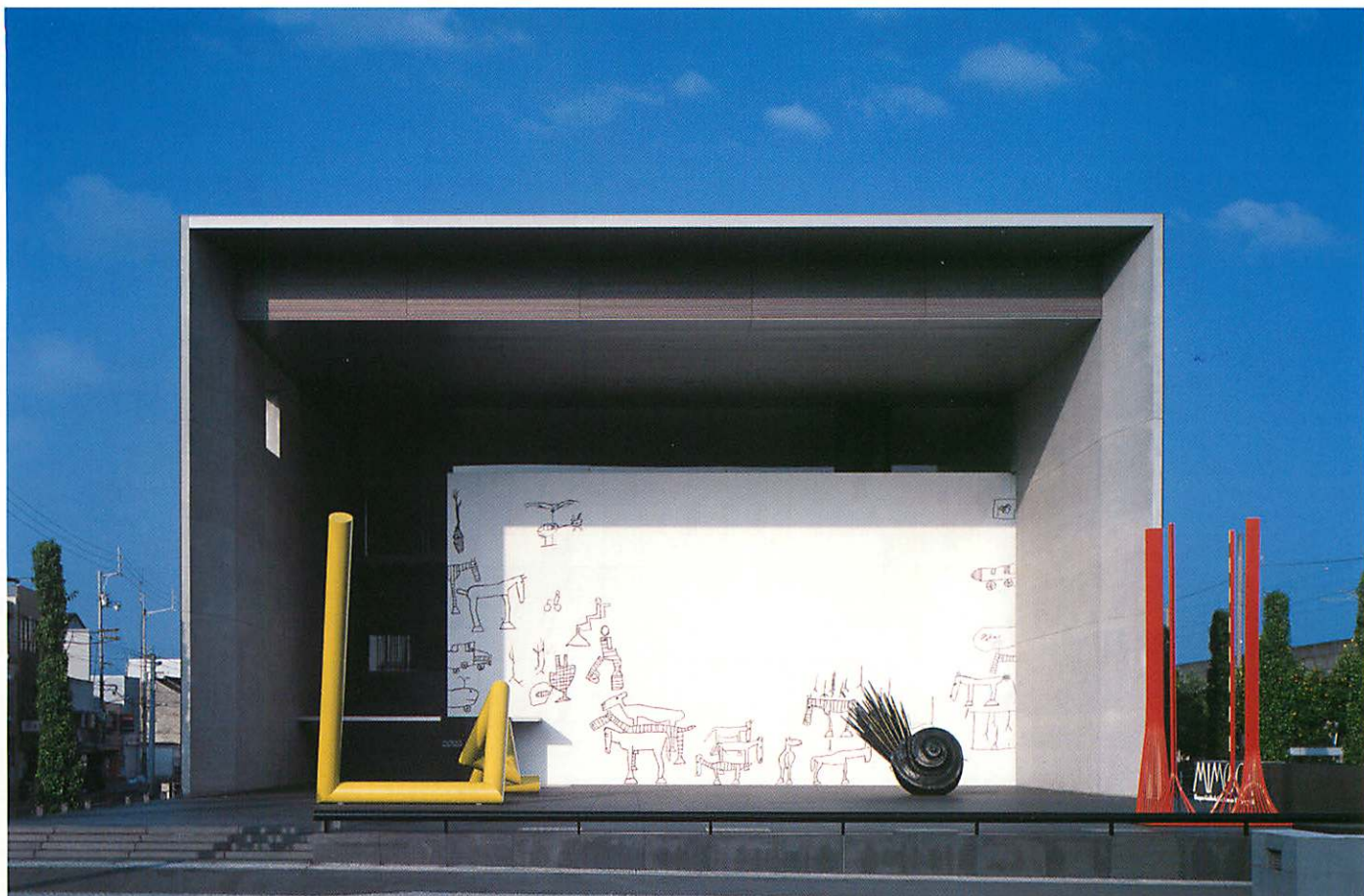
1991 ◆89歳

11月23日、故郷の香川県に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(ミモカ)が開館する。計画段階から猪熊本人が全面的に協力し、美術館正面の大壁画《創造の広場》、館内のいすやトイレのマークにいたるまで猪熊の感性がすみずみまでゆきとどいた美術館となる。
天井の高い展示室にあわせて、4メートルにもおよぶ大きな作品《宇宙都市休日》や《手の残した言葉》を制作し「開館記念 猪熊弦一郎展」に出品される。
またオープンに先駆けて行われた[美術館開館記念「猪熊先生をかこう!」子どもスケッチ大会]では、ミモカの造形スタジオを歩き回る猪熊自身がモデルとなって子どもたちに描かれ、できた作品は商店街の店先に展示される。
「大人になっていかなる職業を選ぼうとも、どんな時も美しいものが理解できる人間に成長してもらいたい」という猪熊の願いを継承してミモカワークショップなど子どもを対象とした取り組みを続ける。

1993

5月17日、亡くなる。90歳。

★はガイドブックのページと対応しています。



創造の広場

美術館の顔である大壁画「創造の広場」の前には、向かって左から「星座」、「シェルの歌」、「四つの生命」という3つのオブジェがあります。いずれも猪熊の作品です。

鑑賞学習教材 大型図版



[企画] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
公益財団法人ミモカ美術振興財団
「鑑賞教育について考える会」メンバー

[デザイン] b.c.d

[撮影者] 山本紉

[印刷] 平和写真印刷株式会社

[発行] 2011年3月31日

*猪熊弦一郎作品 ©公益財団法人ミモカ美術振興財団

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／公益財団法人ミモカ美術振興財団

〒763-0022 香川県丸亀市浜町80-1

TEL 0877-24-7755 FAX 0877-24-7766

<http://mimoca.org>

